
千葉県における淡水ガメの大量死:捕食者はアライグマ?

小菅康弘

NPO 法人カメネットワークジャパン

Mass death of Fresh water turtles in Chiba. : Is the predator Raccoon?

By Hiroyasu Kosuge

Fresh Water turtle Network of Japan

現在、日本の淡水カメは、生息地域である田んぼや河川、池沼などの護岸、用水の整備、道路の新設等の環境の改変によって、個体数の減少が危惧されている。加えて、外来種の侵入がさらに大きな脅威となって影響を及ぼしている。

そのひとつの事例として、2008年2月から3月にかけて千葉県・君津市の河川にて行った淡水カメの生息調査にて、例年にないほどの数のカメの死体が発見されたことが挙げられる。死体の数は、クサガメ94個体、ニホンイシガメ11個体で合計105個体であった。死体の特徴としては、1個体を除いては甲羅に外傷は見当たらず、頭部、四肢、尾などの部位に外傷あるいは欠損している状態で、内臓がなくなっているものも少なくなかった。また、捕獲された生存個体(99個体)ではクサガメでは30%、ニホンイシガメでは40%の数の個体が、頭部、四肢、尾の甲羅以外の部位に外傷あるいは欠損が見られる状態であった。その外傷および欠損の状態が段階的に広がってはいないことと、個体の健康状態が悪くないことから、病気や中毒症状ではなく、ほかの動物による捕食が原因と考えられた。

そのため、調査地周辺に生息する哺乳類の捕獲生息調査を行い、アライグマ5個体、タヌキ3個体が捕獲された。胃内容物を分析すると、アライグマからはカメは発見されず、タヌキ1個体からカメの頭部や肢などの一部が発見された。

タヌキは在来種であり古来よりカメを捕食していたものと考えられるが、アライグマは、本来は日本にはいなかった北米原産のペット由来の外来種であるため、新たに地域の生態系に大きく影響を及ぼす恐れのある動物として注目すべき動物といえる。

県内のほかの川でも調査を行ったところ、複数の地点で今回と同じようなカメの死体と同時にアライグマの足跡が発見されて、被害が広範囲に及んでいることが予測された。

今回のカメ大量死の原因としては、アライグマが疑わしいが、明かとするためには、カメに対して最初にダメージを与える動物を特定する必要があり、現在もビデオ撮影等を用いて調査を進めている。

●メッセージ

カメの大量死の原因は明らかとなっていないものの、これ以上の被害を防止する上で、一刻も早くアライグマを取り除くことが必要です。しかし、一部の地域を除いて捕獲等の対策はまだ始まったばかりというのが現状です。今、日本ではアライグマに限らず、元々ペットであった動物が

捨てられたことによって、日本の自然を脅かす存在になっています。飼いきれなくなったからといって、絶対に野外へ放すべきではありません。最後までペットと付き合っていくことが、そのペットにとっても大事なことです。都市河川や公園でよく見かけるミシシippアカミミガメ(ミドリガメという名で売られているカメ)も、もともと日本にはいなかった外来種です。今では日本全国に分布し、水草や、魚、鳥、カニ、エビなど食性が広いことから、各地で影響が心配されています。これ以上は広げてはいけません。里山を代表するように日本人は古来より自然とうまく向き合ってきました。これからはずっとうまく向き合っていくには、一人ひとりのモラル、そして、多くの方々のご理解、ご協力がが必要です。是非お互い協力しあって、これからも日本の豊かな自然や文化を次世代にも伝えていくために大切にしていきたいと考えています。